

Friends of the UN Post Disaster Management in Korea ～超新星家族～

2012年10月9日～11日 被災地（陸前高田市、大船渡市）から初めての海外旅行へ

始まり／Preamble

現在（いま）もなお仮設住宅で苦難の生活を強いられている人達の現状を知らない人達はきっと「へえっ、被災地の人達が海外旅行に行ったんだ…」程度にしか感じないだろう。

何故、少なくとも岩手沿岸部の方々にとって、これが初めての試みだったのか？

何故、世界中から多くの日本人が被災された方々への「**想い～**」はあっても、複雑な要因があって実現出来なかったのか!？

この3日間のストーリーを綴ろうと想い立ったのは、

「仮設にお住まいの方々の**想い**を忘れない様に、**私達は伝えなければいけない**」私達（スタッフ）自身が、「これ程、**感動した3日間**はなかった」と痛感したことに他ならなかった。

「**人間の弱さ**」それ以上に感じた「**人間の強さと意識の高さ**」。

それらの総てが「**凝縮され内在された旅**だった」。

責任／Obligation

当初、各セクションからの**リスク要因**をシミュレーションした項目は合わせると軽く**200**を越えていた。

簡単な話が、「**生活復興支援**」の為なら、私達しか出来ないプログラムを果敢に実施してきたスタッフでさえ、「**形に見えない支援**」と被災された方々にとって「**このツアー（プログラム）は本当に必要な支援なのだろうか!?**」との想いが交錯し、「**百万言の言葉よりも1つの汗（アクション）は勝る!!**」と集まったスタッフであったが、誰もが寡黙になっていった。

PTSD（心的外傷後ストレス障害）を負ってしまった被災地の方々の心のケアと、症状への対応マニュアルだけでも医療団から報告された**リスク項目は100を越えていた。**

岩手沿岸部から仙台空港、韓国現地、そしてその後の心のケア。

最低限、何かあった時の対応項目を埋めるには事前渡航数回、現地医療団との折衝と各種法律の壁、宿泊ホテルでの対応、当日の案内ルート、どれもが**3日間の為に最低10ヶ月の準備がかかる**という現実を知らされた。

一言で「**リスク**」と言えば保身的に聞こえてしまうが、当初スタッフ皆が一様に噛みしめていた言葉は忘れたくても忘れられない 3.11以降、やむなく**心に傷を負った人達への「責任」を果たせるかどうか!?**だった。

韓国から／Began from Korea

3.11以降、私達は改めて多くの方々の人としての想いの強さや深さを数多く学んだ。世界中の被災地の支援に同行した私達でさえ改めて学んだことが多い1年7ヶ月だった。各方面より多くの支援が寄せられた。

スタッフの体力は限界を越えていたが、それよりも感謝の大きさは比べ様がなかった。例えば、エンターテインメントの業界の方々や、スポーツ、文化の関係者の方々だけを取っても多くの支援申し込みを頂いた。

1年7ヶ月。

東京ドーム、国際フォーラム、横浜パシフィコ、他、私達の本部のあるニューヨークで、私達が主催したイベントやシンポジウム、コンベンションだけでも、皆様のご支援によって毎月何処かで開催させて頂いた。

中でも韓国からオフィスにかかってきた一本の電話は今も鮮明に覚えている。

3.11から1週間後だった。

それは Maroo Co.,LTD（超新星所属オフィス）からだった。

「すぐにでもメンバー（超新星）が被災地、特に大きな被害に遭った**陸前高田、大船渡の方々**の支援に駆けつけたい!!」

その後、福島原発の放射線量の不透明な時期とも重なり韓国政府は（その時期は世界中の主な国々は）**日本渡航**に関して「**注意喚起**」を出した。

Maroo Co.,LTD からは「売名行為と誤解されたくないの、スタッフとメンバーが**ボランティアスタッフの一員**としてだけ参加させてほしい」との申し入れがあった。メンバーのスケジュールをキャンセルをしてでも「**私達は数多くの恩を日本の方々から頂いてきた。少しでもお役に立ちたい!**」と具体的な日時も幾つか提示して頂いた。

震災3日後から現地に入っていた私達は、スタッフ皆が不眠不休で各作業に追われていたこともあり、実現したのは4月になってしまい Maroo Co.,LTD の方々には申し訳なかった。

韓国政府からの注意喚起はそれでも解かれていなかった。

私達が連絡してから1週間後、彼等（超新星メンバー）は**現地**に立っていた。

私達のビブス（FOUN）を着用して陸前高田、大船渡、多くの避難所に**3万枚の医療用マスク**を届けるという支援を、朝から夜遅くまで食事も取らずに本当に一人の**ボランティアスタッフ**としての業務だけに専念してくれた。

私達スタッフは、Maroo Co.,LTD のスタッフと**超新星メンバー達の「覚悟と想い」の真剣さを、誰もが感じ取った。**

約束／Engagement

あれから2ヶ月後、私達は再び被災地に立っていた。

メンバー自らが選んだ祖国 韓国で、病気になった時にオモニ（母）が作ってくれた
「**元気になる韓国料理**」の素材と、沢山の調理器具（プロパンガス、大きな鍋等）
を携（たずさ）えて。

「何故、韓国料理なの?」

私達は現地の人に、炊き出しをしているメンバーが**超新星である事を初めて告げた。**

「大勢の人が炊き出しに来てくれたけど、本物の韓国料理は初めてだった!」

「本当に美味しかった!」「海を渡って来てくれたことを忘れません!」

避難所で生活されている人達の、「**本当の笑顔と初めて遭遇した**」と…、
一人のスタッフが呟いた。

メンバーは涙する避難所の方々の手を強く握りしめて～

『**必ず私達の祖国 韓国にご招待しますから、苦しいでしょうが ——
それまで必死に生きてくれますか?**』と伝えた。

『**生きてくれますか?**』

この彼等の言葉はあの時期、多くの被災に遭われた方々へ伝えたかった
メンバーの心からのメッセージだった。

『**それまで必死に生きてくれますか?**』

このメッセージは現場に立った者にしか分からないのかも知れない。

海を渡って彼等が「伝えたかったメッセージは被災された方々の**心に確かに届いた**」

涙する老夫婦と抱き合いながら、彼等は彼等自身、心に深く刻んだのだろう…。

言葉を越えた「約束」を。

【**超新星_活動の様子**】

http://founap.org/eje/eje_07.html

http://founap.org/eje/eje_15.html

現実／Actuality

「**約束**」の重みと「**現実の壁**」を打ち破るには一つ一つを埋めていくしかなかった…。

私達スタッフはこのプログラム実現の為に陸前高田市、大船渡市、各仮設の自治会に何度も通いながら、その一つ一つを埋めて行く作業に従事した。

内科医の随行、各仮設毎の参加希望の応募方法、ニューヨーク本部への申請、現地医療団との提携 他、問題は山積していた。

内科医師団の目的とニューヨーク本部申請は

『**ストレスホルモンの唾液分析検査**（the stress hormone salivary analysis）』と『**転地治療**』を目的の主体とした。（※参照）

参加者の殆どの方々は（最終的には95%の方々がそうであった）3.11以降、初めての本格的な旅行（ツアー）参加であり85%以上の方々海外旅行自体初めてと事前アンケートで知った。

データの収集の目的は、外面には表れない被災者の方々の渡航に対する心身ケアの対応と、旅によって遭遇、又は発生される非日常的な環境に対して一人一人の

『**ストレスホルモンは、どの様に推移されていくのか!?**』と標（しる）した。

※今回のストレステストは被災者の方々の過度な負担を考慮し血液採取は行わず唾液分析（唾液腺から30種程の酵素が分泌され整理活性物資の分泌の中で主にアミラーゼ等の数値化によってその変動値を測る方法）を実施した。

※転地治療とは住み慣れた土地を離れて別の環境に身を置き療養することを指す。

このプログラムの参加条件は仮設住宅に住んでいる方のみとし、応募方法は原則として各仮設住宅自治会による選定方法を基準とした。

ストレスホルモンの数値と驚愕な変化／ Digitization of Stress Hormone and its Drastic Change

私達医療団のリーダーである松田仁医師と後藤幸将医師はストレスホルモン数値の『**劇的な変化**』に驚かれた。

※この詳細な医療レポートは国連事務局(OCHA)と世界保健機構(WHO)に来年度、正式に提出することになっている。

ツアーに参加された方々は**陸前高田市**の仮設住宅にお住まいの**45名**。

大船渡市の仮設住宅にお住まいの**37名**。

医療団を含む随行スタッフ12名と合わせて**合計94名**となった。

陸前高田、大船渡、それぞれの仮設からのバスが約3時間の行程で仙台空港国際線出発ロビーに到着した際、検査マーカーによる採取を行い、最終的に帰国するまで医療団は採取検査を行った。

被災者の方々、個々によって数値は違ったが、その殆どの方々に**劇的な変化**が表れたのは、2つの出来事だった。

その**出来事**とは!?

「超新星のメンバーと出会った時だ」

そしてもう一つの出来事とは、参加された殆どの方々が3.11以降初めての行為であったかも知れない**「お買い物をされた時」** だった。

「**約束**」から総てが始まったとは言え、多くの仮設住宅から参加して頂きたいという主旨から、今回ツアー（プログラム）に参加された殆どの方々には「**超新星**」の**存在を知らなかった**。

オフィスからの希望で、応募された時点での特別協賛が「超新星／ Maroo Co.,LTD」である事は「約束」された仮設住宅の方々以外は知らされてなかった。応募を締め切った後の行程説明会で初めてそれを開示させて頂いた。

超新星メンバーはジャパンツアーが始まる多忙な時期にも関わらず2泊3日の旅の行程で3度も、被災者の方々の為に駆け付け励ましてくれた。

その中で数値が最も減少したのは、彼等（メンバー）の聖域である彼等のオフィスのスタジオに全員を招いて頂き、被災された方々と「**約束を守った瞬間**」のそれだった。

ファンクラブのツアーを始め、彼等の聖域に外部が入室出来るのは特別だった。

一人一人と握手を交わし、ハグし、全員に「元気になって欲しい!」という彼等の祖国の「活力のモト」である高級高麗人参を沢山頂いた。

メンバーの真剣さと純粋な誠意は確かに伝わった。

今回のツアー**参加者の年齢は7歳**から**78歳**まで多岐に渡っていたが、スターの素朴な、されど輝くオーラと直に接して～、気付けば自然と**魅了**されていた。

アーティストの夢に向かって彼等が汗を流しているこの場所（スタジオ）で**被災者の方々と現在（いま）も「共に或（あ）る**」と伝えたかったことは参加された全員に確かに通じた。

家族を亡くされ一人で参加された70歳の男性の数値が、**144**からその瞬間 **17** にまで大きく**減少したデータ**を見ながら医師は呟いた。

（65歳以上の方々には出発する際には、その平均値を皆がはるかに超えていたが、検査された方々の数値は、ほぼストレスが問題ないとされる30以下という数値を見て）**「これだけ劇的に数値が減少したのを初めて見た**」と記した。

「お買い物」と言うと、私達をはじめ通常の日常生活を過ごされている方々にはピンと来ないのかも知れない。今も仮設住宅にお住まいの方々の3.11以降の歴史を列挙すると、その意味合いは大きく変貌する。

家族を、家を津波で流され、避難所では各方面からの援助物資でやっとの思いで生きてこられた方々の「お買い物」には意味があったのだ。

亡くなった兄弟のお土産ストラップを買う9歳の男の子。

亡き夫の墓前に捧げるために、たった一人で参加された74歳のご婦人が
しっかりと握りしめたお酒の小瓶。

いつも野菜を頂いている仮設住宅にお住まいのご近所の方々に、初めて御礼が出来ると
購入された韓国海苔。

3.11以降初めて、以前使用していた化粧品を購入する気になったと笑って話された
62歳のご婦人と、その傍らで優しく微笑むご主人。

未だに行方不明のお孫さんに渡すために海に届けるんだと、小さなチョコレート
いっぱい抱えた72歳のご婦人。

そこにいたスタッフ全員の目は真赤に腫れあがっていた。

**「お買い物」というのは、生き残った者達全員の使命にも似た
「恩返し」や「自己確認」だったのかも知れない…。**

業務とはいえ、つらい作業だったが医療スタッフは数値検査を実施した。

数値の劇的な減少は想定値を大きく下回っていたことは（特に年齢関係なく女性の方々）
言うまでもなかった…。

※私達スタッフは被災地の方々が否応なしに免税店に行かなければならない通常ツアーの
行程は今回の主旨にはそぐわないと判断していたので、当初はこのツアー（プログラム）
にお買い物をされる時間は組み込まれてなかった。現地でツアー参加者からの強い要望が
あり、最終日の夜の食事後、足のご不自由なご婦人以外、皆が案内して欲しいとの
強いリクエストがあり、急遽組み込まれた行程であったことを補足する。

超新星／Chosinsei

今回のツアー行程は、Maroo Co.,LTD（超新星所属オフィス）からのお申し出により全額をご負担して頂いた。

その中の要望の一つが、マスコミには極力公表したくないとの申し出があったが、私達からニューヨーク本部承諾の被災された方々の「初めてのツアー（プログラム）」なので、今後の具体的な支援方法の指針となる可能性もあり、テレビ局1社、新聞社1紙、雑誌社1紙のみ、ツアー（プログラム）ご参加の方々の同意を得て、現地取材を特別に認めて頂いた。

彼等がこのツアー（プログラム）で一番、気を配ったのは「**食事のメニュー**」だった。朝粥や、韓国料理の定番の石焼ビビンバ、カルビの肉料理だけではなく、味付け等も栄養士に相談しながらの多岐に渡ってのメニューは、参加された方々の何よりの活力となった。

「被災された方々が**美味しいモノをいっぱい食べて、少しでも元気になって欲しい!**」

メンバーの想いが詰まったメニューだった…。

明日に向かって～/Towards the Future

今回のツアー（プログラム）は参加して頂いた全員が病気や怪我もなく、それぞれに**思い出**を心に刻んで無事に仮設住宅に帰宅された。

行きのバスと帰りのバスの中は明らかに違った。

仮設住宅にお住まいの仲間とは言え、当初は全く見知らぬ人達が、**旅を通して**、やがて「**本当の同士**」となっていた。

「**不安**でいっぱいだったけど、また旅行に行きたいと初めて**生きる希望**が小さくけど**芽生えたわ**」

「**参加**して良いか!?迷っていたけど、**勇気を出して**参加して本当に良かった。**仮設の仲間**にも**思い出を伝えたい**」

「何よりも**自分に自信**が持てた」

「亡くなられた人達の方まで～ **生き残った私達が、精一杯人生を謳歌**しなきゃなあ…」

帰路、OZ152便の機内で機長より特別アナウンスが流れた。

「陸前高田市と大船渡市の方々へお伝えします。今もなお、ご苦難の生活を送られている皆様へ。今回の旅が、皆様のつらく厳しい日々を一時でも和らげ、少しでも明日への活力となられますことを、心より願って～」

このツアー（プログラム）に同行したスタッフは、参加された方々と涙の別れをした。一人のスタッフが咽（むせ）びながらこう言った。

仮設の方々がそれぞれ重いバッグや「思い出という土産」を携えたその背中に――、

「**明日に向かって～、皆さんも、そして私達も**――、**また新たな旅の始まりですね**」と。

■ 岩手県陸前高田市仮設住宅参加者

滝の里工業団地応急仮設住宅
モビリア応急仮設住宅
高田高校応急仮設住宅
太田応急仮設住宅
旧広田水産応急仮設住宅
その他、応急仮設住宅

合計 45名

■ 岩手県陸前大船渡市仮設住宅参加者

宮田応急仮設住宅
大田応急仮設住宅
平林応急仮設住宅
小中井応急仮設住宅
杉下応急仮設住宅
山村広場応急仮設住宅
黒土田応急仮設住宅
長谷堂応急仮設住宅
広田小学校応急仮設住宅
轆轤石仮設住宅
その他、応急仮設住宅

合計 37名

(参加者／最年長78歳 最年少7歳)

上記和訳文は、国連の友N Y本部を通じ提出された各国連関連機関及び国連NGOへの報告書（英語原文）より抜粋しています。